「病むアメリカ、滅び行く西洋」を読んで

吉田　廣

（2003 年 6 月 3 日記）

我国で、人口の高齢化、小子化、家庭崩壊、学級崩壊、児童生徒の学力低下等々が問題となっていることは、読者各位も、先刻御承知かと思います。この現象は、アメリカおよびヨーロッパの、白人かつキリスト教国すべてにも起っています。この問題について考察された表題の図書について、筆者なりの解説を試みようと思います。（著者　パトリック・J・ブキャナン、監訳　宮崎哲弥による全訳、（株）成甲書房、2002 年発行、本文 349 頁、本体価格 1,900 円）全十章の内、取敢えず、第四章、「セラピー大国はこうして生まれた」だけでも目を通されるよう、お薦めします。著者は、日本での知名度は低いが、アメリカでは知らぬ人のない保守派の大物で、彼の邦訳書は本書が初めてとの事です。

以下、筆者の文責で、主として、第四章の内容、及び関連部分の要約紹介を試みました。

1914 年、第一次世界大戦が勃発した時、労働者―即ち、マルクスの言う祖国なき者―は階級でなく、中産階級や上流階級、普通の人間同様に、祖国で身分を名乗って戦地へ赴いた。

ロシア革命後、各所で試みられた共産主義革命は、あっさり鎮圧された。

ここで、マルクスの二人の弟子が師匠の弁解を始めた。

最初に、ハンガリーのジェルジ・ルカーチが、みずからの「天才的」アイデアを実践に移し「文化」テロリズムをもたらした。その一環として、彼は過激な性教育制度を実施、ハンガリーの子供たちは、中産階級の家族倫理や、一夫一婦婚の古臭さ、人間の快楽をすべて奪おうとする宗教理念の浅はかさについて教わった。女性も当時の性道徳に反抗するよう呼びかけられた。この思想は後に熱烈に受け容れられることになる。

二番目が、イタリア人共産主義者アントニオ・グラムシである。かれは、ソヴィエトでは、ポルシェヴィキ思想は機能しないことを冷徹に見抜いていた。ロシア人を共産革命から:遠ざけているのはキリスト教思想だという結論を得た。彼は 1937 年、46 歳で病死したが、この理論は正しかったと証明された。

（フランクフルト学派、アメリカ上陸）

1923 年、フランクフルト大学において、ルカーチとドイツ共産党員が「マルクス思想研究所」を旗揚げし、やがて「社会研究所」と改名した。いわゆる「フランクフルト学派」の前身である。1933 年、ヒトラーがベルリンを掌握したため、彼らはイデオロギーごとアメリカへ移住した。そのなかには、大学を卒業したてのヘルベルト・マルクーゼもいた。彼らは、コロンビア大学の援助を受け、ニューヨークに新フランクフルト学派を設立、自分たちに避

難場所を与えてくれた国の文化破壊に取りかかった。
　彼らの編み出した数ある文化闘争兵器のなかに「批判理論」がある...「文化要素を完全否定する批評。キリスト教、資本主義、権威、家族、家父長制、階級制、道徳、伝統、性的節度、忠誠心、愛国心、国家主義、相続、自民族中心主義、因習、保守主義、何から何まですべて」...

　西洋の死に関し、フランクフルト学派は第一容疑者にして主犯格と言わねばならない...学派が先頭に立って擁護した女性解放運動は女性の伝統的役割の価値を失墜させた。
　今やほとんどの西洋女性がフェミニスト同様、結婚と母性に敵意を抱き、結婚する気も子供を産む気持ちもまったくなしという状況だ...

　以上が第四章から抄録した所です。第五章、「大量移民が西洋屋敷に住む日」では、2050年には、全世界で白人乃至ヨーロッパ人は（イスラム教国アルバニアを除いて）マイノリティとなり、例えば、ロシヤ人はアジアから撤退し、そのあとを、イスラム系の住民や、中国人が埋めることになるだろうと予測しています。

　筆者の見る所、マルクス主義は、一･二の国を除いて、政治的イデオロギーの座から降りるか､タテマエとして掲げられる程度となり､経済理論としても破綻したように思われます。ヨーロッパでは、同主義を総括する浩瀚な著作も出版されているが、我国では、全く紹介されないとも説かれています。それが今では、日米欧が築き上げた文化と富を、内部から着々と切り崩していると言う指摘は見逃せないと思います。
　そのほか、家庭崩壊をはじめ、学校教育の崩壊、この頃、新聞でも時々報ぜられる、行き過ぎたジェンダーフリー教材、過激な性教育等々も、第四章で述べられた同根から発生した物と思われ、その他、様様な社会現象についても、納得できそうな議論が展開されている事も、一読に値すると思われます。（完）